京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十四卷 第五號

昭和十七年五月

論叢

鎖國以後に於ける南方への關心……經濟學博士 本庄榮治郎

佛印に於ける信用對策に就いて……經濟學博士 松岡孝兒

新經濟論理……經濟學博士 柴田敬

經濟生活の發達と經濟政策……經濟學士 堀江保藏

研究

テュルゴの社會進歩の理論……經濟學士 出口勇藏

ジュースミルヒの人口學觀……經濟學士 青盛和雄

北支農業と灌漑……經濟學士 山崎武雄

說苑

統制經濟と保險……經濟學博士 小島昌太郎

稅制改革後の租稅統計……經濟學博士 汐見三郎

附錄

彙報

ジュースミルヒの人口學觀

青盛和雄

一　序說

ヨハン・ペーター・ジュースミルヒの主要著作「人類種族の變動に現はれたる神的秩序」[1]の初版が發行されてから既に二世紀を經過したが、ジュースミルヒと其の著作に關する評價は彼の祖國に於ても餘り充分とは稱せられ難いにもせよ、既に多少の典據ある文獻が存するけれども、我國に於ては殘念乍ら之に就きての系統的著述を殆んど見ない有樣である。尤もこの事實は原著が所謂る稀覯書に屬し、現今では殆んど入手し得ないことと共に、假令普通に引用さるゝ第四版を閲覽するの機會に惠まれたとしても、其の尨大なる內容を簡單には讀破し難いからであらう。筆者元より身の不敏を知るが故に、茲に彼の人口學觀と題するも餘り新規なる解釋が附加せられる譯ではない。唯曩に「ジュースミルヒの生涯」を錄した一文に續いて、主としてヨーンの一般獨逸人傳記集[2]中に寄せたるジュースミルヒの著作解題を中心として述べ、之に其他の文獻に據つて若干の補遺並びに私見に基く紹介を附加して置くに過ぎない。

曾て米國でクラムなる人物がジュースミルヒと其の著作に就いて可成り網羅的なる研究を發表したと聞いて居り[3]、又比較的最近の年代ではシュルツェ氏の好論文が出版されたことを知るも[4]、共に未だ參照の機會に惠まれない。斯る間に我國に於て戰時下人口問題が漸く喧傳さるゝに及び、この評判のみ高くして實際は餘り高く評價さ

1) Johann Peter Süssmilch; Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, etc. Berlin 1741-76.
2) Allgemeine Deutsche Biographie, Bd. 37. Leipzig 1894. SS. 188-193. (V. John) 拙稿「十八世紀中葉の人口學者ジュースミルヒの生涯」經濟史研究、

れてゐない惠まれざる學者ジュースミルヒの著作に關しても二三の評論が我國にも現はれて來たので、[5] 此の機會に右の如き主旨にて敢て紹介を試みる所以が認められよう。

そこで吾々は先づ彼の傳記的要約から始めて、次に著作の意義を鮮明ならしめたいと思ふ。

グスターフ・リューメリンの所說に依れば、ジュースミルヒの著作は「社會生物學の基礎」と呼ばれるものであり、クナップに從へば當時の社會科學的問題の現實的取扱に於ける唯一の「國民經濟的政策論著」だと解される。經濟學史家ロッシャーは「神的秩序」を以て十八世紀時代の最重要なる「國民經濟的專門書」であると共に、人口現象其者を自己目的として研究せる最初の「人口理論的著述」であると見做してゐる。[6] さればマルサスの劃期的なる人口理論の根本思想は既に我がジュースミルヒに發すとも稱すべきで、[7] 同樣に一世紀後に漸く組織化されたる道德統計なるものも彼の「神的秩序」に最初の萠芽を見出すのである。[8] 而して醫學に於ても亦彼を以て醫事統計各論の創基者たる一人と考へて居り、此事は特に「神的秩序」第一版第七章を「疾病と罷病率に就いて」とし、第二版第十七章を「疾病種類別竝びに時代別死亡」の觀察に當てゝ居り、別に「一七五七年の疫病と過大死亡率の考察」[9] と題せる一著作が存する事實と關聯して、斯る評論は恐らく妥當であらう。他面に於て劃期的なる一般人口統計學の著者ワッポイスの說く所に依れば、ジュースミルヒを以て「人口統計學の開祖」[10] とも仰ぎ、「今日に於ても猶妥當する程の人口統計に於ける基本的命題」を取扱つて居ると見做されて居り、又統計學史家ヨーンに於ても彼を以て「現代的意義に於ける婚姻統計の創基者」とさへ呼んで居るのである。[11]

斯くして彼を假令徹頭徹尾の神學者として性格付けんが爲には、吾々は其の神學觀なるものを解明せなければならぬのであるが、未だ斯る研究の試みられたといふ前例を聞かないのである。況してや上述の如き多面的なる

3) F. S. Crum; The Statistical Works of Süssmilch. 1897 or 1901.
(高野岩三郎氏、昭和四年大原社會問題雜誌稿ズユースミルヒの人口論的著書の初版に關する考證)。
4) K. Schulze; Süssmilchs Anschauungen über d. Bevölkerung. (Recht und

學問分派の創設者とさへ考へられる我がジュースミルヒの一生涯に於ける主要著作「神的秩序」の意義は、強ちに之を單なる神學的著述に過ぎないとは見做し難いので、吾々は茲で悉述の餘裕はないけれども、所謂る人口史・人口統計理論・人口政策なるものを總括せる人口學[12]なる科學部門が樹立され得るとして、彼を呼ぶに最初の人口學者なる表現を以てしたいと思ふ。然らば吾々は先づ彼の生涯の素描から初めて、次に其の著作解題へといふ方針で筆を進めて行くべきであらう。

二　ジュースミルヒの略歷に就いて

ジュースミルヒの祖先發祥地がボヘミヤ北東部に位するラウジッツ州の一城砦に求められる事實から彼が可成高き家柄の系統に屬してゐたことを知ると共に、當時支配的であつた所謂る羅馬加持力教（舊教）の絕大なる影響下に先祖代々に亙つて置かれ續けて來たことに想倒する。其にも拘らずジュースミルヒの曾祖父エリアスが當時ボヘミヤを荒搖せるかの如きプロテスタント（新教）主義への改革に參加せることに依り、爾來幾代に亙つて世襲代官職の繼承と婚姻關係に於て多大の障害を伴つた事實は到底吾人の想像も及ばぬ位であつた。併し乍ら敢然としてルーテル派の所謂る新教的信仰に篤實であつた伯林の一穀物商の子として一七〇九年九月三日に誕生したのが、我がヨハン・ペーター・ジュースミルヒである。[13]

曾ては錚々たる軍人であり、老後を名望あるブランデンブルグ市民として暮した祖父の膝下に在つて學窓生活を初めたジュースミルヒは、語學から醫學へ次いで法律學へとの教育方針が採用されたにも拘らず、最初の自然科學的志向から一轉して青春期を神學的興味の壓倒的なる雰圍氣の中で過した事實は、流石に紛れなき血統と時

Staatswiss. Diss., Halle 1921) cf. Elster und etc.; Handbuch der Staatsw. Aufl. 4. Bd. 7. S. 1173, Meitzel.

5) 統計學古典選集發刊の辭並びに「グラント死亡表に關する諸觀察」及び人口問題、昭和十六年十一月號所載。増田抱村稿「ズユースミルヒの人口理論に

代相とを示すものと思はれる。併し乍ら語學から神學への關心の推移は云はゞ一時的なる情熱の變遷に過ぎず、其の後彼の熱意ある研究はライプニッツ・ウオルフ流の合理主義哲學を經て、イエーナのシュマイツェルに依る國情記述派の人口統計的經驗を積み、其後に於て更に數學及び物理學の如き自然科學方面の研究に關心が推移して居るのであるから、彼の學問的遍歷の旅は幼年時代から全く一巡して元の軌道に戻つたかの感がある。

斯る學究生活の歸結は當然に（物理學の）大學教授たるべく思はれた彼の運命を次の如く轉換して了つた。即ち彼が兩親の反對に遭遇して撰擇の岐路に立たされた瞬間に起つたのは、當時伯林に於けるカルクシュタイン聯隊の將軍家に彼を家庭教師たらしめんとする招聘であつた。熟慮の末之に應諾した彼が漸くイエーナの學都を離れたのは一七三二年に物理學論文を發表した後であり、而も猶この生涯の過渡期を勢々二ケ年位で打切る積りであつた彼も、其間に起つた父の死亡と、此頃では既に彼を敬愛して居た將軍の家庭に於ける慰撫激勵に逢つては、流石の彼もつい其儘に猶二ケ年間を斯る境遇に引留められて了つた。斯くて夙にジュースミルヒの人柄を見拔いて將來推擧すべき意圖を有する將軍に依つて、後に英蘭の政治算術學派の流を汲むの動機となつた和蘭への見學旅行を前提條件に伴へる聯隊所屬軍隊牧師の職が賦與せられたのであるから、青少年時代に於ける自然科學的教養の地盤にフランケ（A. H. Franke）流の物理神學的傾向を帶びた將來有爲なる物理學者たらんとする進路は次の如く變更されねばならなかつた。即ち彼が斯る運命の糸に操られてプロシヤの一將軍家に寄寓したことが、後年に於ける彼の學問に政治的なる關心を深からしめてゐるのである。[14] されば禍福は糾へる繩の如く神ならぬ身の知る由もなかつた彼の運命的就職は、和蘭旅行より歸國直後なる一七三七年に、伯林の宮廷御用寶石商の末娘と結婚生活を營ましむるに及び、彼の生涯には悴三人娘七人より構成されたる十人といふ可成り多數の子供が惠まれ

ついて」並びに昭和十六年商學討究十二月記念論集「戰爭と經濟」中に掲載の南亮三郎稿「マルサスの戰爭及移植民論」を參照のこと。

6) W. Roscher; Geschichte der N.-Ö. in D. München 1874, S. 421.

7) C. H. Hull; The Economic Writting of Sir William Petty. Vol. I. Cam-

て居る。斯る就職と婚姻竝びに子供の出生と云ふが如き人口統計的事實は、斯方面に最初の關心を懷ける學者の略傳としても缺くべからざるものと考へられるが故に、其後彼が天職としたことは何かに就てと共に敢て悉說を續ける所以である。

斯くて現實には一牧師職たるに過ぎないが、理想としては學者たることを念願とせるジュースミルヒに採つても、一七四〇年に勃發せる第一次シュレジア戰爭が彼に所屬聯隊と共に從軍出征するの義務を負擔させたことは至極當然なる成行であつた。蓋し彼自身天職と心得て實踐せる業績は、寧ろシュワイドニッツ要塞への進軍の餘暇に序文を誌したであらうと見做される「神的秩序」第一版に見られる筈であるけれども、吾々はこの著作の表題と目次の引用以外に就いては何等知る所がなく、例へば初版の扉にも第二版以後と同樣にキケロから羅甸語の章句を轉用して掲載してゐるか否かに就てさへも全く不明なる儘に放任されて居り、從つて初版から再版に至る迄の滿二十ケ年に於ける彼の社會的活動時代に就いては餘り記錄も殘されてゐない有樣であるから、此間の關係を多少乍ら其他の文獻から補足し類推して見よう。

一七四二年には伯林に歸つて國王から新教宗教局議員に任命せられ、次いで一七五〇年に組織された高等宗務局議員にも選任されたことは第二版に示されたる著者名の肩書からも知られ得るが如くではあるが、既に一七四一年の有名なる「神的秩序」第一版の著作以來學者としての地位を獲得して居り、一七四五年には既に大學に就任し又は講義を續けてゐる位であり、恐らく一七五六年には「最初の言葉の源泉は人間に依りてではなく創造主たる神に依りてのみ維持されることを擧證せんとする一試論[15]」なる論文に據りて速座に科學翰林院(アカデミー)の會員に擧げられたであらう事實が判明する。されば一七六一—二年の「神的秩序」を發表せることに依り、當時の普國翰林

bridge 1899. P. LXXV. (Graunt and the Science of Statistics.)

8) A. v. Öttingen; Moralstatistik. Aufl. 3. Erlangen 1882, S. 21. 及び岩波文庫版 平. 山村譯「ケトレー人間に就いて」參照。

9) J. P. Süssmilch; Gedanken von den epidemischen Krankheiten und dem

院の錚々たる人々の中でも特に人口論者として銘記されて居り、且統計學の開基者としてジュースミルヒが果した役割は哲學に於てより多くの自然探求を試み、精神研究に於て出來るだけ多くの測定と計算とを取入れたと評されて居る。[16] 此際に於てフリードリヒ二世への生氣潑剌たる獻辭が見られる所以は、其後一七七五年フリードリヒに依りて設定されたる寡婦年金制度でさへもこのジュースミルヒの研究を基礎として居り、之を模範として居る限りに於て、この人口學的勞作と密接なる關聯を有すと見做されてゐる點に辛うじて求められる。[17] 同樣なる獻辭が露西亞のピーター三世に對しても爲されて居るが、[18] フリードリヒ大王に心醉せるピーター三世に對してジュースミルヒが敬意を表した所以は、主として第二版發行の當時に伯林が一時ロシヤ軍に占據されてゐたといふ政治關係にも求められよう。第四版以後の「神的秩序」からは露帝への獻辭は見出されないから、生前最後の出版なる一七六五年の第三版に於ても同樣であらうと推定される。

序でに述べて置くべきことは一七六六年に漸く伯林に呼寄せられたるビュッシング (A. F. Büsching 1724-94) とジュースミルヒとの個人的なる邂逅は恐らく有り得ない事ではないにしても、[19] 既に社會的活動を殆ど中止せるジュースミルヒに採りては何等特別の意味も見出され得ないであらうが、彼が曾て一七五〇年に主張せるが如き生死婚姻に關する登錄制度を整備すべしと希望し努力せる場合と類似せる提案として、彼のビュッシングがフリードリヒ二世に對して若干の公的統計事實の提供を懇請せる時、王の答へが頗る振るふてゐるし、且ジュースミルヒとの相違を示すものとして興味深いものがある。曰く「汝自身が調査せる結果を公表することは敢て妨げようとはしないが、余自ら汝に資料を提供することは決してない」と。[20] この言葉は暗にジュースミルヒを偲びつゝビュッシングに皮肉を言つたのではないかとさへ思はれる。さればディルタイの如きもビュッシングを以て新教

grössern Sterben des 1757 sten Jahres. etc. 1750.

10) J. E. Wappäus; Allgemeine Bevölkerungsstatistik. Teil I. Lpz. 1859. S. 5.

11) V. John; Geschichte der Statistik, Teil I. Stuttgart 1884, S. 262.

12) Ch. Bernoulli; Populationistik oder Bevölkerungswissenschaft. Erste Hälfte.

宗務局議員として活動せる一人として誌してゐるに過ぎないから、[21] この比較統計及び地理學者こそ或は神學者として終始した人物とも稱し得られるであらう。

併し乍ら中風を病んで一七六七年三月二十一日に永眠したこの卓越せる人口統計學者たる我がジュースミルヒに對しては、當時の人及び其後の數世代人は餘りに注目を拂ふことをしなかつたのは何故であらうか、例へば統計學の道統をシュレーツァー (A. L. Schlözer 1735-1809) の所謂る國狀記述派から政治算術學派に移すべしとして此方面に軍配を擧げたるクニースにしても、この獨逸に於ける最初の偉大なる政治算術學者ジュースミルヒに就ては何等觸るゝ所がなく、ジュースミルヒに最大の情熱を注げる統計學史家ヨーンにしても、上記の如く曖昧なるビュッシングとの邂逅や論爭を擧げる位であるから、ジュースミルヒ自身が自著「神的秩序」第二版に論爭してゐるユスティ (J. H. G. v. Justi 1702-71) との關係を悉論し得るに至る迄には、吾々の傳記的考察も日暮れて道遠しの感があるので、略傳は此位で打切つて次の著作解題に移るべきであらう。

三　ジュースミルヒの人口學觀

「神的秩序」が必ずしもジュースミルヒの唯一著作に非ざることは既に述べた所であるが、少くとも人口學に關しては彼の代表的著述であり、次に擧げられる如き興味ある人口研究でさへも、彼の第二版には內容的に充分包含されてゐると見做されよう。例へば普國首都「伯林の急激なる膨脹と建設」に關する著述の如きも、[22] 所謂る政治算術學派の傳統的命題たる都鄙間に於ける人口周流問題[23]として「神的秩序」第二版に於ても取扱はれて居る。從つて彼自身が完全なる新版と稱してゐる再版こそ彼の人口學觀を最も典型的に示すものであらう。

Allgemeine Bevölkerungsstatistik. Ulm 1840, S. 3.
A. F. v. Fircks; Bevölkerungslehre und Bevölkerungspolitik. Lpz. 1898.
13) 拙下前掲拙稿 昭和十六年八月號所載。「ジュースミルヒの生涯」參照。
14) W. Roscher; a. a. O. S. 421.

斯の如く英蘭グロートンに發源する政治算術學派の清流に於て我がジュースミルヒを見出すにしても、彼が先驅者や似而非後繼者（例へばシュラーダーの如き）[24]よりも卓越せる點は、更に一層豐富なる統計資料の驅使と高邁なる見識とに認められる。尤も資料整理の點でより充實振りを示したのは彼以後に於て僅かにケトレー及びマイヤーが存するに過ぎない。斯る尨大にして總括的なる資料を自然的に配列して、自己の意の儘に活用し、恰も既往先驅者に比較して彼が最初の組織家なりと稱せらるゝ程度に迄も到達してゐることが劃然と判明する。茲に於ても彼は現代的意義に於ける統計學の目的を意識せる方法論者であつたと謂へる。即ち曰ふ、「大數觀察は外見的に偶然と思はれる諸現象にも法則性を認識せしむる方法である。」「吾人は先づ個別なる小事例の多數を多年に亙つて蒐集し又全地域に亙つて總括し、其に依つて隱されてゐた秩序や法則が明瞭になる。」「此際に於て初めて斯る秩序法則が如何に齊一なるものであるかゞ吾人に洞察される」と。[25] 吾々は茲に於てジュースミルヒの著作に於ける大數法則の適用と關聯して、其の議論が著しく目的論的性格を帶びてゐる事實を知るのである。[26]

ジュースミルヒはこの新しい學問即ち人口學の資料と方法を彼の時代並びに人類の哲學的問題の爲に役立たせることを知れる最初の人であつた。此際若し彼が人類社會の諸變化中に明瞭に看取される秩序を現世の外界に君臨せる神の意志法則であると解して居るとすれば、このことこそ彼の神學的立場に相應して居ると云へる。換言すればキケロのトゥスクルム別莊に於ける問答集中の標語「吾々は共故に思慮もなく種子蒔かれても居なければ偶然に創造されても居ない、が併し人類種族の爲に計畫し給ふ樣なある力が存在した筈だ」を、ジュースミルヒは當時の他の神學者に見倣つたのか之を勝手に改變して "*Non temere & fortuito sati & creati sumus, & profecto ed quaedam vis, quae generi consulit humano*" として自著の扉に掲げ、卷頭序文中に次の如く解釋して居

15) Süssmilch; Versuch eines Beweises, dass die Erste Sprache ihren Ursprang nicht vom Menschen, sondern vom Schöpfer erhalten Habe, Berlin 1756 u. 1766. (Katalog der Carl Menger-Bibliothek, 1926. S. 66.)

16) W. Diltheys Gesammelte Schriften, Bd. III. Studien zur Geschichte des

る。[28]「既にキケロは人間に關する他の別觀察から斯う解してゐるに違ひない。人間種族の爲に配慮せるある活動的にして本質的なるものが確かに實在して居り、吾人は思慮もなく種子蒔かれ偶然に創造されたものではない」と、以上の如き解說の意味する所は、ジュースミルヒに採つては神の存在は既に確信の域に達して居り、神の科學的認識への疑問は放棄せられたるに非ずやとの感じさへ懷かせられる。だから其に續ける序文中にも、「人間性のあらゆる諸變化は人類の總べての行爲を豫定し給へる神の叡慮と神の意志の氾濫に過ぎぬ證據である」とさへ語つて居る。斯る表現がふさはしいと考へられる彼に於ては、見えざる神の御手の儘なる自然秩序なるものは今更確認する迄もなき豫定調和であつたとも謂へるであらう。併し乍らこの立場こそは往々にして最も素朴にして政策的なる立場との關聯に於て、「神的秩序」てふ人口學的著述が第一版刊行以來二世期の長き期間に亙つて、世人から受けねばならなかつた誠に割の合はぬ誤解を蒙る源泉となつたものであらう。

既に彼の人口理論に於ける間接の繼承者にして而もジュースミルヒと同じく理神論的神學者なるマルサスが、斯界の先達者と全く異つた人口觀を樹立し、斯くてマルサス以後の人口學を支配し、從つてジュースミルヒの著作の評價を地下に深く埋沒し去つたかの感を露呈したのである。何故ならばマルサスに於ては神御自身は世界や人類の創造時代に於てこそ活躍し給ふたかも知れないが、爾來この世界及び人類の兩者は頗る獨自なる發展を遂げ、云はゞ自然(淘汰)法則の儘に放任せられて居ると考へられたからである。マルサスに採つては人類社會は徹頭徹尾自然の外的影響に依存して左右されるものであり、斯る人類發展の姿の中には自然の內的衝動が結付いて居るにもせよ、之は若早や理性や其に依つて遵守されてゐる道德力に依つては到底動かし得ないものである。尤も後年のマルサスには人口の道德的制限なる項目が附加せられては居るが、既に結婚の年齡を延長し、或は意識

Deutschen Geistes. Lpz. und Berl. 1927. SS. 123–152.

17) Roscher; a. a. O. S. 395.

18) John; a. a. O. S. 242. R. Jackel; Das Erscheinungsjahr von Süssmilchs Göttliche Ordnung, in „Die Zeitschrift für die Gesamte Staatsw." Jg. 69,

的なる出産制限が問題とされる限り、ジュースミルヒ以來の根本命題たる一婚姻當り出産力の同一といふ概念は、現實の各民族或は階級別娠孕能力を解明するには既に無用の假説となつたと謂はねばならぬ。斯る人類の發展段階に於ける生物學的なる變遷は別論として、少くともマルサス當時に於ける一婚姻當り出産力同一といふ見解は、本質的には自然科學的であつた。何故ならばマルサスは社會の總體的發展を人間理性の範圍外だと考へてゐるのに對して、ジュースミルヒは此際に於ける「神なるもの」を「無限にして精微なる算術家」として居り、又「總べての時間的にして自然的なるものは、大いさや數及び重さに依り測られるもの」と見做して居るからである。吾々は茲に於てもグローント以來の人口統計學の傳統に生きてゐるジュースミルヒの眞面目を知ると共に、政治算術學派の命名者なるペッティの經濟統計的推算と其の結果を信用せざりしアダム・スミスの流れに於て、經濟學者マルサスの姿を見出すのである。實に前者に於ける自己目的たる人口學研究は後者に於ける經濟學の發生地盤としての手段であつたに過ぎないとの感がある。

「そこには唯動ける物質が存在するのみで、其他に何等の精神も實在せず」と見做せる百科辭典的記載が一般的嗜好を支配するに至つた時代に於ては、上述の如き立脚點に立つ哲學者ジュースミルヒは若早や退場を餘儀なくされたのであるかも知れない。同樣に政策家としてのジュースミルヒも佛蘭西革命の混亂と其の成果の只中に置かれては、彼の著作が世人の注意力を惹付けることは餘りに稀となつた。最後にジュースミルヒの人口政策的見解でさへも、「神的秩序」中に示されて居る資料を其儘に自著の第二編(第十一—二章)に引用せるマルサスの人口法則の前には、其と對立せるかの如きジュースミルヒの見解は全くその支持點を失はざるを得ず、又その事はマルサスに依りて豫告されたる新しい理念を鼓吹するかの如き社會的なる外觀やその拙速なる人口論の普及せる爲の

1913, SS. 138-142.

19) John; a. a. O. S. 94. S. 241. (foot-note).
財部靜治著「ケトレーノ研究」十五頁參照。

20) 高野岩三郎譯著「クニース獨立の學問としての統計學」統計學古典選集第二

自然的歸結でもあつた。

併し乍ら學問發展の歴史に於てジュースミルヒが十七世紀後半の英蘭の經驗科學に源泉を見出せる社會科學、即ちグローントやペッティに依りて創基されたる「政治算術」といふ新しい科學の現實主義的傾向を、彼の「神的秩序」なる著述に依りて之を最も顯著ならしめて居る所の云はゞ境界石となつて居り、又ジュースミルヒ自身が其の新しい組織者と認められて差支ない程度に迄も卓越せる效果を永久に持ち續けるであらう。

以上ヨーンに據る間接なるジュースミルヒの人口學觀を述べたから、吾々は次に彼の著作から直接に內容の一端を研究すべきである。

四　ジュースミルヒの著作「神的秩序」の一節

ジュースミルヒの著作に所謂る人類種族の變動は出生、死亡、增殖の三方面に依りて示さる。即ち「神的秩序」劈頭の序文にモーセの創世記に掲げられたる言葉を引用して曰く、「生よ繁殖よ地に滿盈よ之を服從せよ又……諸の生物を治めよ」[29]と。斯るイスラヘル民族に傳承されたる神託を彼が如何に人口學的に解釋し且つ之を展開せるかを窺ふに、それは四個の相異る言葉と概念に分たれて居り、而も夫々の相互關係は天帝に依りて秩序付けられたとして次の如く述べられて居る。[30]

即ち(一)生よとは天賦の能力としての出產力が確約されて居ることであり、この神の祝福し給へる命令と願望を達成せんが爲に人間行爲が義務付けられると共に、婚姻並びに一般的妊孕能力を妨害する虞ある一切の邪行は禁止さる。この第一法則は次の增殖原理を說く第二法則と結付いてゐる。(二)增殖なる概念は妊孕力と區別せら

卷四四頁より引用す。

21) W. Dilthey; a. a. O. S. 146.
22) Süssmilch; Dissertation von der Gefahr grosser Städte.
22) R. Kuczynski; Der Zug nach der Stadt. Stuttgart 1897. SS. 181-189.

るべきで、其故に增殖は常に必然とは限られず。增殖は婚姻妊孕力のみならず死亡率とその法則に依存す。若し年々歲々出生より死亡が多いことが反覆されるならば、假令婚姻が猶出產能力ありとしても增殖は起り得ない。故にこの命令は創造主の叡智が作用して、死亡率に法則性を死亡に秩序を齎らすと同時に、出產から人口增殖が結果し得る樣に爲し給ふことを意味して居る。斯の如くなることは後に指摘される。(三)こゝでは「地に滿盈よ」といふ第三の異る概念と命令とが爲されて居る。之に依りて創造主の意圖は人間の妊孕力と死亡率との相互關係が密接に構成されるべき點に認められ、又結果として單に人口增殖が生ずるのみでなく、更にこの人間で以て地球を擴充して行き、假令寒冷なる兩極地方や或は炎暑耐へ難き熱帶地方に至るまで地上あらゆる地域に迄及ぼし、尤も其際に於て擴充の段階に種々なる程度の差こそあれ、苟くも人の棲まざる空地を無からしめんとする神意が窺ひ知られる。(四)最後に人類の最善なる創造主は人間を地の主たれと宣言し給ひ、人類に地上の萬物を使用させるといふ特別なる恩寵を惠み給ふとし、地の主たる人間支配には何ものも抵抗するを得ずと云ふが如く、舊譯聖書の辭句を其儘に借用してゐる此箇所に於けるジュースミルヒには何等獨特なる新解釋が試みられてはゐないと謂はねばならぬ。

而して彼が自著中に於て解明せんと欲した內容は次の如き五箇條である。[34] (一)婚姻當り出產力、(二)當該死亡率に秩序性あること及び其の比率相互間に關係あること、(三)出生の死亡に對する超過、從つて(四)人口增殖と倍加の起り得ること、其故に(五)地球上のあらゆる地域に於て漸次に人類の充滿が期せらるべきことゝなる。斯くてジュースミルヒの著作の取扱へる人口學に關する理論と政策に亙る諸章は、右の孰れかの問題に該當する。此際現代人には殆ど自明の如く思はれる出生超過の事實でさへも、この未開なりし人口統計分野に於ける最初の

24) 拙稿「十七八世紀の都鄙人口周流に就いて」第一回人口問題協議會報告。
L. A. G. Schrader; Grundgesetze der Natur in der Geburt, dem Leben und dem Tode des Menschen, Glückstadt 1777. (G. John; Johann Peter Süssmilch und die Gesellschaft des 18. Jh. Reine und Angewandte Soziologie

開拓者に採つては、出生超過の確認といふ嬉ばしき發見であり、[35] 同時に又創造主に依りて爲されたる確約の實現でもあつた。(註) 彼は其他の方面に於て例へば出產力、婚姻、死亡に關する計算の結果たる數的比例の偉大なる恒常性や都鄙別に於ける類別異同に關しても頗る精微なる考察を試みて居るが茲では悉述の餘裕がない。

(註) ヨーンに依れば出生超過の事實はジュースミルヒの發見に非ずと云ふも、[36] 少くともこの命題の一般化に彼の貢獻ありと認められる。又或る點ではジュースミルヒがその自耳義に於ける偉大なる後繼者とも見做されるケトレーと區別される特徵は、後者が運命論的であり、云はゞ決定論に墮して居るに反し、前者の人口變動に於ける秩序なるものは云はば時と處に應じて可變的であり、且少くとも人間力の作用を認める限りに於て、人間の意思活動に自由なる餘裕を殘してゐる點に認められよう。[37] その顯著なる實例は戰爭に際しての人口變動に於てゞあらう。

吾々は「神的秩序」の尨大なる內容中から特にジュースミルヒをして神意の實在をば自覺せしめたと考へられる戰時に於ける出產男女別の秩序の攪亂に就いて、彼の所說の一端を研究して次に之に觸れて述ぶべきである。グローント以來傳統的命題たる人口に於ける男女別割合の觀察に都鄙別と移住關係との影響を檢討した後に、戰時に於て男の出生が比較的多い事實を彼は次の如く解してゐる。[38]「平時に於ては男兒の出生が多いから、男性はより多く生存すると同時により多く死なねばならぬとし、大戰爭の闘はれてゐる時代には、男兒出生の超過に依つて男女割合の不均衡が消失する迄は、男よりも女の方がより多く死なねばならぬことになる。若し吾々が兩性の死亡數を正當に判斷すれば、此等のあらゆる事情が克服されるに相違ない。」

以上が戰時出生に於ける男兒超過の發見者ジュースミルヒの性別決定理論に於ける補償說と稱せられるもの、正體であるが、[49] 其の立論根據となれる統計を、卷末の表から抽出して見ると恐らく次の如きものであらう。卽ち一七二二年から一七三二年の十ケ年間に於ける出生性比は一〇五・七若しくは女二〇對男二一であり、一七三二

Leipzig 1936. S. 33.)

25) Süssmilch; d. göttl. Ordnung, Aufl. 2. Teil I. § 17.

26) F. Žižek; Grundriss der Statistik Aufl. II. München 1923, S. 19.

27) „*Non enim temere nec fortuito sati et creati sumus, sed profecto fuit quaedam*

年以降一七四一年は一〇四・八又は二五對二六であるのに、彼の從軍せるシュレジア戰役を含む自一七四二年至一七五一年の期間に於ては一〇六・五或は五〇對五三で示される。茲に於て彼の生死均衡の人口觀と一夫一婦制を維持すべき男女別割合の恒同性とは、男性の戰死を女性の死亡增加で補ふよりも寧ろ出生に於ける男兒超過に神の攝理を認めしめるに至つたのである。斯の如く死亡の空隙を出生で補塡するとの思想は或は宗教的根據に求められるのであらうか、頗る興味深き問題である。

併るに彼がコロンブスにも喩へた先驅者グローントが倫敦市及び郊外の人口で測定した出生性比が、女一三對男一四及び一五對一六で、女兒百に對する男兒の割合は一〇六・六以上である事實に鑑みれば、[40] ジュースミルヒ當時の戰時出生に於ける男兒超過は決して天の配劑にあらず、前者よりも大數の人口統計を取扱つた後者の議論が必ずしも卓越せるものとは稱し難い。況してや戰時出產に於ける男兒超過の原因が、死產率の減退にあり、受胎時點に於ける男兒割合の上昇にあらざることを知る吾人に採つては、[41] 出產率減退の傾向と共にこの戰時出生に於ける男兒割合の上昇原因をも人爲的であると見做さざるを得ないのである。

斯る觀點に立つ時に於て、出生と死亡との關係竝びに出生超過の事實から、吾々はあくまでジュースミルヒの本來の說明に立歸つて、男兒出生が多いから、男性はより多く生存すると同時により多く死亡せねばならぬとの必然的因果關係を確認すべきであつて、決して男兒出生の超過を女性死亡の增加に依りて、男女の性別比例を均衡せしめる必要はない。同樣にして死亡率を出生率に依りて補つてゐるのではなくて、意志自由を離れた出生率に依りて死亡率が規定されるのであると考へられる。吾々は之以上ジュースミルヒに托して生死相關理論に於て出生率を原因とする多產多死說に就いての私見を挿むことは遠慮すべきであらう。

vis, quae generi consuleret humano. "*Cicero in „Quaestiones Tusculanae,*" *Lib. I C. 49-118. (tr. by J. E. King. Tusculan Disputations p. 142.)*

28) Süssmilch ; Die göttliche Ordnung etc. Ausg. 4. 1775. Teil I. S. 60.

29) Seyd fruchtbar, und mehret euch, und erfüllet die Erde, und machet sie

五　結　言

以上ジュースミルヒの「神的秩序」解題の爲に、著者の略歷の檢討に筆を起し、第二版以後の著書に於ける扉に誌されたる章句の解明を中心として彼の人口學觀を語り、次いで其の內容の一端を窺ふ爲に舊譯聖書からの引用語句の解釋竝びに出生男女別の秩序と變動の原因に關する彼獨自の見解に就いても觸れたのであるが、本稿は斯る部分的なる概觀に過ぎないにしても、彼が如何に終始一貫して其自身を目的とせる人口理論の究明に邁進せるかの姿を幾分乍ら紹介し得たと考へる。

扨、ジュースミルヒに採つては人口變動の豫定さるべき秩序から偏倚せる特殊現象の原因を探究することが絕えず問題であり、其故に彼の研究には常に一聯の形式正しい因果解析が伴つた。例へば都市死亡率の大なる原因、都鄙別結婚數に差異ある理由、時代に依る婚姻數の變遷、從つて婚姻當り妊孕力卽ち出生數に多樣性がある原因の如きも、悉く彼の研究對象として網羅されてゐるが、斯る廣範圍に亙る考察は別論に讓るとしても、斯くして獲得せられたる多方面に亙る人口法則の基礎理論的命題を發展せしめた結果が、彼に於ては專ら人口政策的問題として取扱はれてゐることを忘れてはならぬ。[42] 蓋し「神的秩序」の第二版に附加せられて居る所の絕對國家に於ける人口政策てふ常規道に關する議論は、必ずしも彼の人口理論及び研究方法の基本的見解に於てのみ必然的に逢着すべき問題とは限らないから、茲では斯る雰圍氣を知るに足ると考へられる「神的秩序」第二卷末尾に掲げられたる次の如き特徵ある神への祈禱人類への祝福の辭を引用して置かう。[43]

曰く「我が祖國の爲に余の希望することは、農業を出來る限り完全に遂行せしむること竝びに工業が中庸を得

euch unterthan, und herrschet etc. I. Mos. 1, 28. Süssmilch, a. a. O. S. 4–6.

33) 高野岩三郎著、社會統計學史研究第一卷一一六頁以下「ズユースミルヒの人口論」參照。

34) Süssmilch ; a. a. O. S. 8.

て堅實で而も實慮に基き整序せらるべきこと、就中農耕に從事する人口が一層よく增殖することに依り、國家安康と國力竝びに國富の充實が計られ、剩へ祖國の商業的繁榮に德性と正義とを伴へる秩序正しき自由が確立される樣に祈ることである」と。之は恰も十八世紀中葉の戰亂續く普國に在つての痛切なる民族の叫びであつたが、戰時下の現段階に於ける我國の人口經濟政策にも適切なる指示を與へるものであり、所謂る國防國家に於て士農工商の產業體制を如何に配置すべきかに就いて之を指導する概念とも見做され得よう。

斯くて從來餘りに神學的と誤解され過ぎてゐた「神的秩序」なる著作の中から、吾々は先づ「元始に神天地を創造たまへり」に發し、「神光あれと言たまひければ光ありき」と續くが如き類の獨斷的なる神學觀を辨別すべきであり、其爲にはその著書の扉の言葉を元通りのキケロに戻すが如くにして、吾人はこの著作を礎石として新しい學問として人口學の建設に乘出し得るであらう。斯る人口學の對象として人口現象を貫く法則を見出すが爲には、そこには人間の意思自由と不自由の限界が存することを確然と認識すべきであつて、例へば戰時出生に於ける男兒の比較的に超過せる事實でさへも決して神慮の左右し得ざるものなることを知らねばならぬ。斯る觀點に立つ時に初めて眞に科學性を賦與されたる人口學の樹立が企圖され得るし、又吾々人類に斯る希望を達成せしむる點に於て、茲にジュースミルヒの人口學を回顧し彼の學說を新しく復活せしむる意義も認められるであらう。

（ジュースミルヒの百七十五年の周忌に當り、彼の著作出版の思出も深き三月中旬頃稿了。）

35) W. Winkler; Das Problem der Willensfreiheit in der Statistik, in 'Revue de l'institut internationale de statistique' Ann. 5. Livr. 2. S. 119.
36) John; a. a. O. S. 263. Roscher, a. a. O. S. 421.
37) G. Jahn; J. P. Süssmilch und die Gesellschaftslehre des 18. Jh. in „Festgabe für F. Tönnies", Lpz. 1936. S. 3. (cf. John, a. a. O. S. 247.)
38) Süssmilch; Die gottliche Ordnung. Ausg. II. Teil II. 1762. S. 266.
39) Handwörterbuch der Staatswiss. Aufl. 4. Bd. IV. Jena 1927. S. 867 Geschlechtsverhältnis der Geborenen, (W. Winkler)
40) J. Graunt; Observations upon the Bills of Mortality. Hull, Vol. II. a. a. O. p. 389. 久留間鮫造氏譯著、二百十七頁。
41) 拙稿「出產男女別の統計的研究」經濟論叢昭和十六年七月號參照。
42) G. Jahn; a. a. O. SS. 32-33.
43) Süssmilch; Ausg. II. Teil II. a. a. O. SS. 533-4. Roscher, a. a. O. S. 424.